

愛媛政経懇話会

第526回例会

第526回愛媛政経懇話会が23日、松山市のホテルであり、長崎大熱帯医学研究所の山本太郎教授（国際保健学）が「withコロナ社会の見取り図 ウイルスとの共生の視点から」と題し、感染症の歴史や進化から新型コロナウイルスとの向き合い方を語った。

講演要旨

主が必要で、その存在を毀損（きそん）する行為は自らの生存への脅威になる。その意味で長い目で見れば

喪失は健康に大きな影響を及ぼす可能性があり、ある種の微生物の不在が病気を引き起こす事などが分かってきた。

や社会的経済的に困窮した人だ。戦争と言ったが故に、勝つまで我慢が必要ない息苦しい社会になってしまった。守るべき相手がいて、ウイルスと緩やかな共存関係に入るまで一定の我慢をすればいいのなら、もっと違う心の持ちようがあったのではないか。

中世ヨーロッパがペストで封建的身分制度の実質的解体に向かったように、パンデミックは時に社会変革の先駆けになる。変化は突然ではなく、見えていた兆しを早回しするように起こるものだ。経済の低迷や人口減少、人工知能（AI）の活用。今生きている社会の様相を知り、未来の社会を想像することが必要だろう。

withコロナ社会の見取り図
ウイルスとの共生の視点から長崎大熱帯医学研究所
教授（国際保健学）

山本 太郎氏

未来想像 変革の端緒に

1918年から流行したスペイン風邪は2年間で3回の波が世界を襲い、5、6億人が感染し、季節性インフルエンザに変わった。新型コロナウイルスも人口の一定程度、個人的にはおそらく3割程度が免疫を獲得することで初めて収束が見えるのではないかと考えている。ウイルスの目線ではどうか。ウイルスの生存には宿

ウイルスは宿主の生存を担保する方へ進化すると考えられ、その傍証にはウイルスが他のウイルスからわれわれを守っていたり、胎盤の形成に大きな役割を果たしていたりする点がある。私たちの体にいる約100兆個もの微生物のかく乱や

パンデミック（世界的大流行）の当初、世界の指導者は「ウイルスとの戦争」だとメッセージを発した。だとすれば倒すべき相手はコロナウイルスだろうか。これは戦争ではなく、われわれの前には守るべき相手しかない。それは重症者

悟しなければならぬ。感染症は農耕の開始による人口増加や野生動物の家畜化で社会に定着し、長い人類史の中では極めて最近の事と言える。一方で、コロナウイルスを見ても過去20年で新たに3種類が出てくるが、おそらく度を越えた頻

次回は10月14日。第一生命経済研究所所長調査部首席エコノミストの永浜利広氏が「コロナの影響と今後の経済動向」（仮）と題して講演する。



やまもと・たろう 1964年広島県生まれ。長崎大医学部卒業、東京大大学院博士課程国際保健学専攻修了。JICAアジアバブエ感染症対策プロジェクトチーフアドバイザー、京都大学大学院助教授、ハーバード大公衆衛生大学院特別研究員、外務省国際協力局課長補佐などを歴任。専門は国際保健学、熱帯医学、医療人類学。